

日韓比較龍宮論覚書

『朝鮮民譚集』を起点として

A Comparison between the Japanese and Korean Discourse on *Ryūgū* :
An Analysis of the Korean Folk Stories

小池淳一

KOIKE Jun'ichi

はじめに

①素材について

②ミヨキとナマズ

③鯉と亀

④海と山

おわりに

【論文要旨】

龍宮とは海の中に存在するとされてきた理想郷で、そこにかかわるさまざまな説話や伝承が民俗文化のなかには遺されている。本稿は海中の異界の代表としての龍宮をめぐる比較民俗研究のための予備的な考察である。

そのための素材として1930年に日本で刊行された孫晋泰の『朝鮮民譚集』をとりあげる。この書物は日韓の民俗研究の胚胎期における重要な資料集であった。ここに収載された説話は、編者が直接に聞き取った当時の伝承が中心をなしている。そのなかで、①国土を支えているとされる巨大な水棲生物をどのようにとらえていたか、②日本の「浦島太郎」に代表される龍宮訪問譚における水界の生き物の役割と位置づけ、さらには、③海の龍宮が山の神やその信仰とどのように関わるのか、といった点を糸口に、比較研究の可能性と意義について考察してみた。

これらの分析視角からは、日韓双方の民俗文化の基底にある共通要素やそれらと宗教文化との関わり、地理的生業的な条件が、信仰や説話の伝承に与える影響などといった論点を抽出することができる。今後はこうした点に留意してさらに比較研究を進めていく必要があるといえよう。

【キーワード】 鯰, 鯉, 「浦島太郎」, 龍神, 山の神

はじめに一本稿の問題意識

海は生業の空間であるとともに、その空間に生きる人々に影響を与える超自然の存在とも深く結びついている。海は、漁をはじめとする労働の場であり、豊かな恵みを与えてくれる一方で、時にはとてつもない厄災をもたらすところとして畏怖されることも少なくない。海をめぐる人びとの意識は、この二つのはざまに神霊や怪異、さらには異界を想定してきた。

また、海をめぐる精神文化は、それをはさんで隣り合う日韓ふたつの文化の共通の基底をなしているともいえる。本稿ではそれらのことを意識しつつ、水中の異界である龍宮に着目して、今後の本格的な研究にむけての問題の整理と予備的な考察を行いたい。

そのための検討の素材として孫晋泰によって編まれた『朝鮮民譚集』を取り上げたい。本書は一九三〇年に出版されたものであるが、その後も、韓半島における民間説話の記録として高く評価されている。まず、その位置づけについて確認し、次に龍宮もしくはそれに類する存在について、ふれられている説話を確認しつつ、その位相について考えていきたい。

以上の作業によって海中における超自然の存在とその根源であり、信仰の中核と思われる龍宮に関する知見を深めることを目標としたいと考える。それによって将来の比較分析の視点とさらなる分析の可能性とを登録したい。

①……………素材について

まず、本稿での分析の対象となる孫晋泰『朝鮮民譚集』の位置づけを確認したい。⁽¹⁾1900年生まれの孫晋泰は、1920年に日本に渡り、早稲田大学に入学、人類学や東洋史学を学んだ後、東洋文庫に勤務した。帰国後は、宋錫夏、鄭寅燮、秋葉隆、今村鞆などともに朝鮮民俗学会を設立、1933年には機関誌『朝鮮民俗』を刊行した。『朝鮮民譚集』は1930年に東京の郷土研究社から出版されたもので、孫の研究のなかでは比較的初期のものに属する。

孫が日本に留学し、学問的な知見を蓄え、その視点のもとに、休暇もしくは帰省の際に採訪を重ねて集めた資料が『朝鮮民譚集』の核となっている。さらに附録として、類似する説話を文献（漢籍、仏典、説話集など）から列挙しており、それらは説話研究、口承文芸調査における孫の視野の広さを示すものといえよう。

出版元である郷土出版社は柳田國男と深いつながりがあった岡本千秋が運営しており、雑誌『郷土研究』の刊行をはじめ、柳田とその研究仲間の著作を手がけて、日本における民俗研究の黎明期を支えていた。孫の『朝鮮民譚集』は、そうした帝国日本における民俗学・人類学形成期に生まれつつあった大きな潮流のなかに位置づけることのできる書物であり、日韓両国にまたがる知的な営為に基づいた貴重で優れた資料的な達成といえることができる。

『朝鮮民譚集』は、初版が刊行されたのちも、優れた資料集、韓半島における口承文芸研究の基盤をなすものとして高く評価されてきた。1966年には岩崎美術社の民俗民芸双書7『朝鮮の民話』として附録を除いて刊行された。さらに2009年には勉誠出版から増尾伸一郎の解説を付して復刊

されている。

増尾によれば、『朝鮮民譚集』における口頭での採集資料に、文献資料を附し、双方を意識する研究上の視点は、のちに『韓国民族説話の研究』（1947年）にも受け継がれている。「口承文芸と説話文献を総合的に比較分析しようとする方法は、初期の研究（『朝鮮民譚集』をさす。―引用者注）からは一貫していた」[増尾 2009: 12] のである。

本稿では、龍宮に最もよく象徴される海中の異界とその生活のなかにおけるイメージを探り、日韓双方の比較民俗研究を進めるための素材として、『朝鮮民譚集』を軸として検討をおこないたい。『朝鮮民譚集』には山中異界にかかわる説話は多いが、海中異界（龍宮）にかんするものはそれほど多くない。「出潮・退潮・津浪の理由」、「女山神と龍王」、「鯉女と貧しい男」、「棺は大きく」、「ウルソーの悪龍」、「放鯉得龍女」、「犬と猫と珠」といったものをここでは対象とすることができるにとどまる。しかしながら、これらを具体的に分析することで、比較研究の基礎的な視点は確認できるものと考えられる。以下、こうした説話のなかを示されている水中異界や異郷、龍宮およびその住人たちの姿に目を凝らし、日本の民俗研究をはじめとする従来研究成果を想起しながら考察を進めていきたい。

②……………ミヨキとナマズ―国土の説話的構成

われわれが生活をくりひろげる大地や大海、山岳・湖沼・池川などがどうして現今のような姿になっているのか、という疑問に対して、民俗的な世界において説話のかたちで、その解答をすることは、学術的な狭義の神話や伝説の問題であるとともに宇宙観や世界観あるいは他界観にもかかわってくる。民俗的な説話でも、神話や国家によって文字化されて重要視される起源譚としても深い意味を持っている。

『朝鮮民譚集』には「出潮・退潮・津波の理由」と題されて、次のような知識が報告されている。

海の中には非常に大きい鯰がある。それは海の底の大きい穴の中に棲んでゐて、その穴から出ると、海の水が穴に入るので退き潮となり、反対に、それが穴に入ると、穴の水が出るので出潮になる。そして時々あばれ出すと海が荒れて海溢になる。[孫 1930: 23]

ここでは鯰となっているが、注記に「鯰は朝鮮語でミヨキ或はミコヂと謂はれ、^{どじょう}鯰の形をしたものとされている」とあり、実際の伝承としては鯰ではなく、ミヨキすなわちドジョウにあたる魚だったことがわかる。それを鯰としたのは日本語で出版されることに対して、編者の孫晋泰が配慮したのかもしれない。

日本における鯰と国土とをめぐる伝承は広範であり、また多種多様なものがある。そのなかでとりわけ、すぐに思い浮かべることができるのは、近世末に流行した鯰絵であろう。頻発する地震に対して、社会改革への希望の民俗的な表現とでもいべき「世直し」の思想がむすびついて鯰絵という錦絵が流行し、その背景には鯰が地震を起こすという信仰があったことが注目された [アウエハント 1979]。こうした伝承的な心意が韓半島にもあり、その表象はミヨキであったといえる。

日本列島においては鯨であり、韓半島においてはミヨキであったということは単純に比較しても面白い問題であるが、このふたつの魚の生態まで広げて考えることが必要なように思われる。鯨もミヨキも水界の生物であるとともに、陸上に程近いところにも生息し、水際で多く発見、観察できる。そうした日常的な経験とその蓄積の上に、こうした伝承が維持されてきたのではないかと、思われるし、実際に泥のなかから鯨やミヨキがはい出る姿は、ごく限られた狭い空間のなかで生物によって環境が変動するというを具体的に示していたに違いない。

また鯨絵に表象された地震を引き起こす鯨というイメージは、逆に地震を防ぐために鯨の自由な動きを封じるといった感覚も導いていた。鹿島の要石の信仰がそれであり、この問題については小島環禮の論考「鯨と要石—日本の地震神話の展開—」[小島1996]がある。小島の議論は日本だけではなく、地球規模の広い視野に立ったものであるが、ここでは、特に日韓比較の問題をさらに押し広げる事例としてアイヌの伝承を参照しておこう。

小島によれば、北海道二風谷では国づくりの神であるコタンカムイが、天から降りて来て島を造ったが、それはアメマスの上であったために、アメマスが暴れると地震が起こると伝えられていたという[更科1963:116-117]。そしてこのアメマスを二人の神が押さえているといい、またアメマスが海の水を飲んだり、吐き出したりすることで、潮の干満が起こるとも考えられている[小島1996:60]。

災害をひきおこす巨大な魚を神が押さえているという発想は、日本における鹿島の要石と通じている。また巨大な魚のふだんの動きが、海の干満として意識されているという点では韓国の巨大なミヨキの伝承と同じである。つまり、国家の枠をこえ、言語の壁を乗り越えて、原初的な大地をめぐる感覚として、こうした伝承は北東アジアに広がりを持っているのである。

それは素朴であるとともに、日常的な水界の観察に支えられる面もあり、自然説明の由来譚として文化的な価値を持っていたといえる。日韓、そしてアイヌ文化にこうした巨大な魚類をめぐる説話が伝承されてきたことは、水界への関心とそこに付与されてきたイメージに共通の基盤を想定することを許すだろう。日本列島も韓半島も同じ説話的空間、すなわち「国土」の上に存在しているのである。

一方で、ナマズとミヨキという別々の表現となっていることについては、互いの地域がたどってきた歴史が投影されており、それぞれの国における宗教文化の影響を読み取ることができるだろう。この点について韓半島での検討は今後の課題とし、日本列島における展開を確認しておこう。

日本という国土をめぐる巨大な生物については黒田日出男による刺激的な研究書『龍の棲む日本』[黒田2003]が提出されている。それによると金沢文庫に所蔵されている「日本図」は14世紀初頭のもので推定される現存最古の日本全図である。そして、この「日本図」に描かれている国土の周囲には巨大な動物が描かれており、この外側は異国もしくは異界と認識されていたらしい。

問題となるのはこの国土を取り巻く巨大な動物は何であったか、ということである。残念ながら金沢文庫の「日本図」は東半分が失われており、頭部と尾部の姿かたちを知ることはできない。しかし、黒田は数多くの傍証とともにやや時代の下った「大日本国地震之図」をも参照することで、著書のタイトル通り、日本という国土は龍によって取り巻かれていると認識されており、その表現が金沢文庫の「日本図」であると主張している。すなわち、中世段階の日本においては、国土をめ

ぐる巨大な生物は鯨ではなく、龍なのであった〔黒田 2003 : 54-60, 170-174〕。

いうまでもなく龍は想像上の動物であり、仏教思想とともにそのイメージが広がったと考えるのが自然である。実際に龍を自然のなかで具体的に観察することはできないが、さまざまな自然現象を、龍と結びつけて理解したり、解釈することは、日本列島上の社会では珍しいことではなかった。本稿の問題関心からすると、海中の異界である場所を「龍」宮とし、その主を「龍」王とすることなどは、端的な例である。そしてこうした仏教的な文化がアジア全体にも影響を与えていたことも意識しておかねばなるまい。そうした広域の文化史のなかで、鯨は龍のバリエーションであっただろうし、ミヨキもまた龍の末裔なのかもしれないのである。

さらに日本では地震と土砂崩れを「蛇拔」と認識することも少なくない〔笹本 2003〕。蛇もちろん、龍の生活世界におけるバリエーションである。そして龍、蛇、鯨あるいはミヨキといった水界にありながらも陸とも深い関係を持つ生物に託された感覚は、日韓を含むアジア世界に広く共通していることが確認できる。

③……………鯉と亀—龍宮への案内役

海底もしくは水中の世界に、理想郷があり、何らかのきっかけにそここの行き来が可能になるといえるのは、海をめぐる文化のなかでも、ユニークなものであり、海そのもののイメージを豊かに膨らませる。異界としての海の端的な表現としてこうした理想郷を龍宮と呼んできたことは日韓に共通している。

『朝鮮民譚集』には、「放鯉得龍女」と題された次のような説話が収められている。

昔、一人の漁夫が独りになつた老女と一緒に暮してゐた。彼は朝早くから出て漁をしそれを売つて母を養つてゐた。或る日は魚が一匹も釣れないので彼は諦めて帰らうとしたが最後の鉤を投げて見た。ところが今度は鉤の先が異様に重くなつたので引き上げてみると、それは黄色をおびた大きな鯉であつた。けれども鯉は口をもぐ／＼しながら泣くやうであつたので、可哀想に思つて漁夫はそれを海の中へ放してやつた。翌る日例の如く海岸へ出ると突然一人の見知らぬ青衣童子が現はれて彼に掛をするので「誰方ですか」と尋ねると、その童子はいとも叮嚀に「私は龍王の使者でございます。昨日あなたがわが王様の姫君を救うて下さいましたので、龍王はその御礼がしたいと是非あなたを龍宮まで迎へて来いと仰言いました」と答へた。「しかし私は人間です。どうして海の中へ入ることができませう」と漁夫が言ふと、「御心配には及びませぬ」と答え乍ら使者は海に向つて何やら呪文を唱へた。すると海は真つ二つに割れてその間に立派な坦々たる大路が現はれた。使者に連れられて龍宮に到ると龍王は襪裸足のまゝとび出て漁夫を迎へ、漁夫のために盛大な宴会を三日三晩張られた。そして「貴君は娘の恩人です。どうか娘を貰つて下さい」と龍王は申し出た。漁夫は龍女と結婚して幾月かの間は凡てのことを忘れて楽しく暮したが、或る日彼は家に遺して来た母のことを思ひ出したので「家に一寸帰りたい」とその妻に懇願した。龍女は再三之を留めたが遂に己むを得ず之を許した。そして別れに際して一つの宝函を漁夫にわたし乍ら「龍宮へ帰るまでは決して之を開いてみては

いけませぬ。この函は此に向つて呪文を唱へると海が割れて陸路がその間に出来るのです。けれども一度開いて見たが最後この函は何の役にも立たなくなります」と幾度も繰返して言ひ聞かせ、その呪文まで教へてくれた。漁夫は龍宮から出て海岸に到り、函に向つて教へられた呪文を唱へた。すると果して海と陸との間に大きい路が現はれた。漁夫はこの世界の岸に達した時その函の中に何が入つてゐるかそれが見たくて仕方がなかつた。二三度躊躇したが遂ひに彼はその蓋を開いてしまった。すると函からは唯だ薄い煙のやうなものがぼうと立つたのみでその中には何もなかつた。漁夫はそれで龍宮に帰られなくなつたと云ふ。(一九二四年八月、慶南東萊郡邑、朴氏夫人談) [孫 1930 : 235-237]

なおこの話には「慶尚道地方においてこの話は普遍的である。」と付されている。

一読してこの説話が日本の「浦島太郎」と同話型であることがわかる。とすると次の問題は、日本の「浦島太郎」とこの説話との関係である。日本の「浦島太郎」が韓国に伝播したのか、あるいはその逆で、「浦島太郎」は韓国起源の物語であつたのか。もう少し慎重に考えるとすれば、日韓の双方にもともと「浦島太郎」型の説話が存在し、それが別々に伝承されてきたという可能性もあろう。日本列島と韓半島に「浦島太郎」を生み出す共通の基盤が存在したと考えるのである。

この問題を説得力のあるかたちで解決するには、日韓双方での、この説話の文献記録の発掘と、口頭での伝承の分布からの歴史的な深度を備えた推察が必要である。残念ながら、本稿ではその用意が十分ではないので、このことは課題の登録にとどめざるを得ない。

しかし、この説話の『朝鮮民譚集』への収録から確認できることもある。まず、口頭伝承としての歴史的な深度は不確かであるものの、「慶尚道地方において普遍的である」ことは、調査が行なわれた一九二四年の時点で、韓半島のこの地方で、「放鯉得龍女」がよく知られていたこと、言い換えれば、広範に受容されていたということを示している。いつから伝えられてきたものかは分からないものの、この地域の人々によく受け入れられ、口頭の説話として人気があつたものといえるだろう。

さらに、こうした説話の細部も韓半島の生活世界において無理のない、自然に受け入れることのできるものであつたことも確認しておきたい。日本の民俗文化研究の立場からすると韓国版の「浦島太郎」である「放鯉得龍女」は、自然なかたちで生活のなかに溶け込んでいるのである。

歴史的な深度や伝播の議論を必要とする一方で、慶尚道地方において普遍的なこの説話は、細部においても日韓の民俗比較に耐えうると言える。そこから、この説話の日韓の差異に注目しておきたい。それは龍宮へと主人公が導かれていく際の案内役が、日本では多く亀であるのに対して、韓国では鯉であるという点である。

日本の「浦島太郎」研究は膨大な蓄積があるが、なかでももっとも包括的に調査研究を進めている林晃平は、「浦島亀乗譚」という研究領域を設定している [林 2001 : 175-220] ほどで、浦島と亀とは切っても切り離せない親和的な関係にあるといえる。もちろんこれは印象論に近い一般論であり、亀ではない龍宮への案内役が登場する説話がないわけではない。⁽²⁾ それでも韓国では、主人公を鯉が龍宮へと案内するというのは、日本から見ればユニークで大きな違いである。

なぜ、鯉が龍宮への案内役として設定されるのだろうか。亀は海で回遊する一方で、産卵などの

ためには陸へやってくるのが広く観察され、海からの使者、龍宮の住人としてのイメージにふさわしい。ところが、淡水魚であるはずの鯉が、なぜ龍宮と関わりを持つとされるのか、韓国社会における鯉のイメージを追求する必要がある。

『朝鮮民譚集』には、他にも異類女房譚としての「鯉女と貧しき男」で、貧しい男のもとにやってきて、幸福をもたらす異界の女性の正体は鯉であった、とされており[孫 1930: 121-123]、韓国の民間説話において、こうした存在は一定の普遍性があることがわかる。さらに「犬と猫と珠」でも龍王の息子が鯉の姿で登場している[孫 1930: 241]。ここでは龍宮の宝として、願うと何でも出てくる珠が登場する。鯉は説話の次元で海と陸とをつなげているのである。こうした鯉のイメージの根源に注意する必要がある。

その際に参考になるのは、実際の鯉の生態と、鯉をめぐる漁の問題である。淡水魚に分類される鯉であるが、実は淡水と海水とが混じりあう汽水域でも棲息することができ、それをふまえた漁も行われているのである。その具体的な例として、日本の茨城県大洗町の涸沼における漁撈を取り上げておこう⁽³⁾。涸沼は涸沼川を介することで近接する太平洋の干満の影響を受けて、海水が流入する湖である。この涸沼ではスマキと呼ばれる漁法が発達してきた。竹で編んだ簀を湖の中に設置して、潮による干満で生じる流れを利用しながら、魚を捕獲するもので、50種類以上の魚を捕ることができ。岸辺の低湿地に生えるヨシの周囲でおこなわれる産卵などの魚の習性を巧みに利用しながら、この漁はおこなわれ、海の水を意識しながら、鯉をはじめとする淡水魚も漁獲の対象とすることができるのである。

このように鯉は実際の漁撈において、海水と淡水、海と川とを結ぶ存在なのである。そして、潮の干満を意識することは、海中に想像された龍宮の存在と連動してきたといえるのではないか。このことは、説話のなかの鯉の描かれ方にも影響を与えてきたに違いない。鯉が「浦島太郎」型の説話に登場することは蓋然性があるのである。

さらに、「放鯉得龍女」では、主人公が龍宮へむかう際に、海のなかに道ができたと言られる。こうした海中への道は、潮の満ち干を意識し、強調した描写であり、語り口ではないだろうか。主人公が龍宮と行き来をする際に、「海は真つ二つに割れてその間に立派な坦々たる大路が現はれた。」とか「海と陸との間に大きい路が現はれた。」と言られるのは潮の干満によって、水が満ちていた空間が、一定の条件のもとでは陸となることの比喩とも考えられる。そしてその延長として龍宮が空想されたといえよう。

このように考えてみると、鯉も日本の伝承における亀と同じか、それ以上に海とかかわり、そこに生育し、かつ人間とも関係を持つ存在であることが理解できる。そして、そのことで、説話的なイメージが膨らむ水界の生物ということができるとはいえないか。海に生じる龍宮への道も、海水についての観察と想像力が結合して生み出されたと考えられる。「放鯉得龍女」に示されている鯉や海中の道といった龍宮への回路は、海とそこに生きる生物の長期にわたる観察に基づいて形成されてきたのではないか、という見通しを述べておきたい。

④……………海と山—その相関・交流と表象

龍宮をめぐる説話の主題は、人間の暮らす陸上の世界と海の生物や自然現象との関わりであることが、ここまでの検討から浮かび上がってきた。この点について、もう少し別の角度から考えてみたい。その際に注目したいのは「女山神と龍王」[孫 1930 : 115-119]である。

この説話はやや長いので要約しながら示しておこう。

ある閑良^{ハンリヤン}(武士)が海辺で少年たちが亀を捕らえて殺そうとしているところに出会った。武士は少年たちに金を与えて、亀を助けて海に放してやった。亀は自分が海の龍王であるといい、「何かあなたの生命に関する危急な場合がある時は、必ず力になりましょう」と言って海中に没した。

その後、武士は山の中の一軒家で老婆に会う。この老婆は自分は、元は山の神霊であったが、狐の化身である悪女によって追われたといい、その悪い女山神に気をつけるように、と言う。

女山神は美しい女となって現れ、武士を誘惑するが、武士は応じない。そこで、女山神は怒り、無数の火の劔で武士を切ろうとする。武士は龍王のことを思い出し、「私に七日間の猶予を与えてほしい」といい、山を降りて、海辺に行き、龍王を呼んだ。龍王は自分の三人の弟を遣わして山神を討とうとした。しかし、龍王の三人の弟である龍は、山の神の火の劔に切られてしまう。女山神は、武士を抱こうとするが、武士は「もう一度一ヶ月の猶予を与えてくれ」と言って再び龍王の許へ行く。

龍王は、今度は天の神に訴え、天上の三人の武士を遣わす。三人の武士は強い雨と激しい風を起こし、ついに女山神を退治する。その正体はやはり大狐であった。武士は天の三武士に礼をいい、老婆を山の神にし、龍王にも礼を述べた。

海辺で龍王を助けた主人公は、山で狐の化身である山の神と戦いになる。主人公は龍王に助けを求め、龍王は、最初その弟を遣わして山の神と戦うが勝てない。そこで、天の神に助けを求め、ようやく打ち破ることができた、という筋書きである。

ここでは龍神および天の神と山の神（その正体は実は狐）との闘争が示されているが、海と山との相互交渉が描かれていると象徴レベルでとらえることが可能であろう。つまりこの「女山神と龍王」には山と海との連関、相互の交流が説話的に示されているといつてよい。

水中の異界の問題としては『朝鮮民譚集』のなかでも「棺は大きく」[孫 1930 : 131-132]で池の中に葬られた両親は、龍王とその後になった、と語られており、淡水であっても水界が、龍王、さらには龍宮のイメージと重なっていることがうかがえる。山中であっても龍宮は、池などを通して身近であり、龍王を意識する伝承が息づいていたのではないだろうか。山の神霊が龍王と対峙するという感覚もこうした心意と関係があるのかもしれない。

こうした問題について考える予備的な作業として、日本の民俗文化における山と海との相関関係にかんする成果を参照してみよう。

池田弥三郎はその晩年に「海神山神論の計画」〔池田1985〕という論考を発表している。ここでは柳田國男の『山島民譚集』（1914年）と折口信夫（釈道空）の『海やまのあひだ』（1925年）との発想に、海と山との間に展開する民俗、とりわけ神観念の問題が共通すると論じていた。さらに海の神と山の神との接触を想定するとともに、その神の出現の場の問題や依り代、漂着神の問題が論じられる計画であった〔池田1985：96-97〕。

池田の問題提起は、日本列島が、地理的に海のすぐ傍に山があり、あるいは海から切り立ったかたちで、あたかも海中に山岳が突き出たような地形の島が多いことへの注目起因している。そうした自然条件が、日本の民俗を大きくとらえようとした際に、意識して議論されるべきだという主張であった。

この計画にもとづいて「海神山神論」が書かれるはずであったが、最初の柳田と折口という日本の民俗学出発期の大先達の感覚や著作の題名に込められた心意を探る段階で池田の死によって中絶してしまった。ここでの海と山とが、子細に観察すると民俗的には隔絶してはいない、という主張は興味深い。

例えば、山の神の信仰のなかで、海に生息するオコゼが好まれ、猟の成功を祈願するために、猟師がそれを携行したり、山の神に供えるため入手に心を砕くという民俗は広く知られている。山岳地帯における生業活動にどうして海の魚が必要であったか、合理的な説明は不可能であろう。そしてそれだけに、こうした山の猟とそれをつかさどる神の祭祀に海の要素を不可欠とする考え方が本来的であり、文化の深い層において維持されてきたものが表出しているのではないかと考えられるのである〔大林1990〕。

オコゼと猟師の関係は海の要素が山の生業にかかわる例であるが、逆に海の漁師が山の産物を珍重する例もある。マンネンダケとかサイワイダケと呼ばれる特異な茸を持っていると魚がよく獲れるとか、舟に乗っていて風を祈る際にこれを用いるのだ、という伝承が和歌山県西牟婁郡などに伝わっている。同県の東牟婁郡四村の大浜では、「むかし、山の神と龍神とが宝くらべをしたときに、山の神は万年茸即ち山の神の杓子をかくし、龍神はヲコゼを隠して、お互いに相手のかくしたのを見たがるから、その見たいものを供えれば、効果がある」という伝承があったという〔沢田1969：89-90〕。この伝承における「宝くらべ」という表現は平和な趣があるが、海の神と山の神との対峙、相互の対抗関係を示すものと考えてもよいだろう。

こうした海の神と山の神との相互の関係を、広範な資料と周到な視点とでとらえようとしたのは北見俊夫『日本海島文化史の研究—民俗風土論的考察—』（1989年）である。このなかで北見は特に「[海の神]と[山の神]との交流」という章〔北見1989〕を設けて、この問題に取り組んでいる。ここでは、寄り神を山に祀って漁の成功を祈願することや、山の神が龍神と婚姻関係を結ぶという説話に注意を促し、海神・山神の相関とそのシンボルの問題は、日本列島文化史に深く関わっていると主張している。

こうした日本民俗学における山の神と海の神をめぐる研究蓄積とその基本的な分析視角をふまえて、「女山神と龍王」を再度、検討してみよう。ここでの主人公である閑良は、龍神である亀を助けたことによって、海の側の力を得ることができ存在である。一方で山の女神は邪悪なイメージで語られており、もともとの山の神霊であった老婆を追いやって山を支配していたとされている。

そして、閑良と龍神たちは、一度はこの女山神に敗れるが、天の神の助けを借りて最終的には勝利をおさめるという構図である。

海と山との間を行き来する存在として描かれる閑良は、龍神である亀に慈悲を施し、もとは山を支配していた老婆を山の支配に復帰させるといった倫理的で、仁愛や正義を具現する存在である。彼が女山神となっていた狐を龍神や天の神の助けを得て駆逐するというのは秩序の回復を担う存在であることを示している。

こうした神と神との闘争に関わり、一方の勝利に貢献するという存在は日本の民俗では狐師として伝承されている〔柳田1997(1920)〕。「女山神と龍王」では、必ずしもそうではないが、類似の神を武力で助ける存在として造型されていることは確かであろう。そしてこうした主人公を間に置き、その事蹟を語ることで、海と山との交流が強く印象づけられ、説話化しているといえることができる。

龍宮が英雄と関わりを持ち、さらにそこでの行き来が可能であると説話の形式で語られ、記憶されることで、水中の異界は陸上の生活のなかに刻まれてきたのである。こうした海の神（龍神）と山の神とが、日本の伝承では、宝比べという程度の対立や相互の認識であるのに対して、「女山神と龍王」では天の神までが登場しての秩序の再編が描かれている。この違いが何を意味するのかは、他の類似の説話を広く比較検討していかねばならないだろう。

おわりに

『朝鮮民譚集』には龍宮の主ではないが、龍（大蛇）が描かれている説話も収録されている。「ウルソの悪龍」と題された説話では、沼にイシミーという龍が棲んでおり、これを退治する様子が述べられていて、この龍は馬の血が大嫌いであるとか鉄製の掌甲によって弱るとされている〔孫1930:149-150〕。

こうした説話の基盤には、水神と馬との関係とそれにまつわる信仰があるものと思われる。水の神あるいは河童と馬との関係もユーラシア的な広がりがあり早く指摘されてきた問題である〔石田1960(1948)〕。本稿では日韓の比較の前提として、限られた僅かな資料を、主として日本の民俗研究の成果を参照しながら考察してきた。しかしこの作業は日本と韓国というふたつの文化のなかだけで論じ、考究するだけではなく、広くユーラシア大陸とその周辺—日本列島も韓半島も周辺に過ぎないことは、さらなる比較文化研究の必要性とつながっている一の問題として扱うことを意識すべきであろう。

しかし、本稿の限られた分析視角からだけでも、日韓双方の民俗文化の基底にある共通要素やそれらと宗教文化との関わりをとらえていく糸口を見出すことができた。また地理的条件あるいは生業活動における認識や感覚が、信仰や説話の伝承に与える影響も論点として抽出することができた。今後はこうした点に留意してさらに比較研究を進めていく必要があるといえよう。

日韓の漁民の信仰を比較する研究を進めた亀山慶一は、船に祀られる神—日本では広くフナダマ（船霊）と呼ばれる—に着目した〔亀山1986〕。その背景にあるのは、漁業民俗全体が同質・等質の構造を持つ、という認識であり、そのことは信仰民俗が同じ環境、同じ漁法のもとに発生したという仮説につながっている。この観点は日韓の海の文化を考える上で極めて示唆的である。

これが果たして船に祀られる神だけの問題にとどまるのか、ここで見てきた龍宮やそこに表象される水中の異界の問題にも適用できるのか、諸賢の御教示を得て理解をもう少し深めていきたいと考えている。

表題に掲げた龍宮という問題は、韓半島の釜山(プサン)の龍宮寺という存在をめぐる伝承や、『韓国口碑文学大系』のような浩瀚な資料集を徹底的に利用することで、さらに新しい視点を追加したり、ここで見出した課題を深化させることもできよう。さらに検討、分析すべき対象がまだ眼前に数多く見出せることを確認して、ひとまず、稿を閉じることにしたい。

註

(1)——以下の孫晋泰と『朝鮮民譚集』に関する記述は、[増尾 2009]による。なお、孫の民俗学史における位置づけについては[金 2014]をはじめ、多くの注目が集まっており、その業績の評価は今後、ますます進展していくものと思われる。

(2)——一例を挙げれば、安倍晴明が龍宮を訪問する説話が、『篋篋抄』をはじめとする陰陽道関連のものとして存在するが、そこでは蛇が亀に代わるか、それに

近い役割で登場する。この種の説話については[小池 2013]を参照されたい。なお、龍宮における時間の流れの速度が異なることが暗示する問題については[小池 2015]を参照。

(3)——以下の汽水域における漁については[安室 2018]による。なお鯉をめぐる日本の民俗信仰については[田中 2014]も参照。

参考・引用文献

- アウエハント、コーネリアス(小松和彦ほか訳) 1979『鯉絵—民俗的想像力の世界—』(せりか書房、のち岩波文庫)
- 池田弥三郎 1985「海神山神論の計画」『日本文学伝承論』(中央公論社): 94-97
- 石田英一郎 1960(1948)『新版河童駒引考』『石田英一郎全集(第5巻)』(筑摩書房): 5-270
- 大林太良 1990「東と西 海と山—日本の文化領域—」(小学館)
- 亀山慶一 1986『漁民文化の民俗研究』(弘文堂)
- 北見俊夫 1989「[海の神]と[山の神]との交流」『日本海島文化史の研究—民俗風土論的考察—』(法政大学出版局): 78-90
- 金廣植 2014「植民地期における朝鮮学・民俗学・孫晋泰」『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究—帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学—』(勉誠出版): 323-365
- 黒田日出男 2003『龍の棲む日本』(岩波書店[新書])
- 小池淳一 2013「陰陽道の説話的起源」『年報月曜ゼミナール』5: 91-103
- 小池淳一 2015「日本民俗の時間観—陰陽道の民俗的展開を中心として—」『HERITEX』1: 90-98
- 小島環禮 1996「鯉と要石—日本の地震神話の展開—」『民俗学論叢』11: 45-76
- 笹本正治 2003「災害文化としての伝説」『災害文化史の研究』(高志書院): 115-147
- 沢田四郎作 1969「山の神」『山でのことを忘れたか』(創元社): 75-91
- 更科源蔵 1963『アイヌ民話集』(北書房)
- 孫晋泰 1930『朝鮮民譚集』(郷土研究社)
- 田中久夫 2014「鯉に乗る神覚書」『陰陽師と俗信(田中久夫歴史民俗論集5)』(岩田書院): 381-427
- 林 晃平 2001『浦島伝説の研究』(おうふう)
- 林 晃平 2018『浦島伝説の展開』(おうふう)
- 増尾伸一郎 2009「孫晋泰の比較説話研究」孫晋泰『朝鮮民譚集』(勉誠出版): 120
- 安室 知 2018「迷入陥穽漁法の起源と展開—スタテの大型化と潮流の影響をめぐって—」安室知編『汽水の生活環境史』(神奈川大学常民文化研究所): 53-82
- 柳田國男 1997(1920)「神を助けた話」『柳田國男全集(第3巻)』(筑摩書房): 45-109

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2019年5月24日受付, 2019年8月5日審査終了)

A Comparison between the Japanese and Korean Discourse on *Ryūgū*: An Analysis of the Korean Folk Stories

KOIKE Jun'ichi

Ryūgū is a utopia that is said to have existed in the sea, and this notion has been handed down through various related tales, legends, and folk customs. This paper is thus a preliminary inquiry of comparative folk studies on *Ryūgū* as a model underwater world.

Hence, Son Jin-tae's *Korean Folk Stories*, published in Japan in 1930, is used for the study analysis. This book is an important collection of works from the early period of Japanese–Korean folk studies. The tales listed therein are mainly contemporary legends that the editor had heard directly. Moreover, potential and significant comparative research is conducted beginning with the representation of huge aquatic creatures that protected the country; the role and position of aquatic creatures in *Ryūgū* tales represented by Japan's "Urashima Tarō"; and the association between *Ryūgū* in the sea, the mountain gods, and belief in the mountain gods.

From these analytical perspectives, the following viewpoints can be extracted: common factors underlying the Japanese and Korean folk cultures, their connection with religious beliefs, and the influence of geographical and occupational conditions on the transmission of beliefs and folk tales. In the future, promoting further comparative research by focusing to these perspectives will be essential.

Key words: catfish, carp, Urashima Tarō, dragon god, mountain god